



今最も熱いアーティストに  
直撃インタビュー！

**CLOSE**

**&**

**PERSONAL**



Shai Maestro Photo by Bariel Baharlia/ECM Records  
Lee Jones

# shai Maestro

Photo by Bariel Baharlia/ECM Records

シャイ・マエストロ

静かに日が昇るように、  
ゆったりとした〈タイム〉から幕を開け、  
カルテットが静かに呼吸を始める。  
それも彼の(マンフレート・アイヒャー)アドバイスだ

イスラエルの次世代を担う若き名匠シャイ・マエストロのピアノは我々の傷ついた心を癒し、再生へと導いてくれる。これまで完璧を目指すが故に、音楽と自身が離れていく感覚に陥っていたというシャイだが、ECM第2弾の『ヒューマン』では「よりリアルな自分に近い本来の姿を音楽に投影できるようになった」と語る。本作で従来のトリオに同世代で盟友のトランペット奏者フィリップ・ディザックを加え、厳かで儚くも清々しいハーモニーを展開し、さらなる音楽的進化を遂げている。

「トリオ編成はジャズの基盤ではあるけれど、6枚目となる今作では新しい軸となる声ほしかった。ボーカルなのか、サクソなのか、いろいろ検討しているうちにフィリップのことが思い浮かんだ。音楽的にも個人としても僕たちの相性はぴったりで、彼こそが僕が探していた個性だとピンときた」

プロデューサーは前作『ザ・ドリーム・シーフ』に引き続き、ECM創立者のマンフレート・アイヒャー。シャイが全幅の信頼を寄せる伝説のプロデューサーはアルバムの構成にも大きく携わっている。「彼にはすべてが見えていて、ここといった時にいつも正しい助言を与えてくれる。それは曲の編成についてもいえること。静かに日が昇るように、ゆったりとした〈タイム〉から幕を開け、カルテットが静かに呼吸を始める。それも彼のアドバイスだ。彼の言葉の通りだと僕も感じたし、彼はアルバム全体に、はっきりした指標を示してくれたんだ」

前アルバム収録の〈ザ・ドリーム・シーフ〉と今作の〈ザ・シーフズ・ドリーム〉は、同じリズムコンセプトを持ち、内容的にも表裏一体である。

「〈ザ・ドリーム・シーフ〉は短い即興の繰り返しだけれど、〈ザ・シーフズ・ドリーム〉はかっちりコンポーズされていて即興部分はほんの少ししかない。それでも近いこれら2曲は兄弟的關係があり、ある意味、つながっているといえるね」

またタイトル曲の〈ヒューマン〉は〈ザ・シーフズ・ドリーム〉の作曲中に生まれ、激しい〈ザ・シーフズ〜〉のコントラストとして書いた『静』の部分が独立して出来上がったという。

「ドラムのパートから書き始めた〈ザ・シーフズ〜〉だけれど、メロディは落ち着いた雰囲気にしたくて。いくつか書いているうちに、もうひとつの命が吹き込まれ、〈ヒューマン〉が生まれた。新たな1曲として別のかたちを与えられるべきだと感じたんだ」

見えない糸でそれぞれの楽曲がつながり、ひとつのアルバムを織りなしている『ヒューマン』。その小宇宙でシャイの才能は無限大に広がり、シンプルながらも至高の輝きを放っている。現在は一時的にニューヨークから故郷のイスラエルに戻り、映画音楽を手掛けながら、コンピューターを使った最新の作曲法で、より多くの可能性を見出している最中だと話すシャイ。2019年には東京フィルハーモニー交響楽団との共演(※ニューヨークを拠点に活躍する作編曲家の扶間美帆がコンサートをプロデュース。指揮はアメリカのシンシナティ交響楽団でアソシエイト・コンダクターを務める原田慶太楼。)を果たし、ひとつの大きな夢を叶えたシャイであるが、彼のビジョンはまだまだ果てしなく広がっているようだ。

最後に、このパンデミック下においてシャイから日本のファンへ温かい言葉が届いたので、その一字一句を紹介したいと思う。

「ここ10年間、日本のファンが僕をずっと見守り、サポートしてくれたことに関して心から嬉しく深い絆を感じている。皆さんと音楽をシェアすることはこの上ない喜びであり、可能ならば、すぐにも日本に行きたいと思っている。この難しい状況下において悲しみに沈み込むことは容易いけれど、でもこの状態はずっと続くものではないので、皆さんには心を強く持ってほしい。そして、希望をもって未来に立ち向かってもらいたい。また皆さんと顔を合わせる日を今から心待ちにしているよ」  
(落合真理)

## Lee Jones

今も昔もギターを演奏する時は、  
いつも心(ハート)でプレイすることを心掛けている。  
感じ方だったり、表現だったり、イントネーションだったり、  
タイムキーピングにしてもね。  
それらが音楽的に最も大切なことだと思っているから。

ウェルカム・トゥ・「ア・ニュー・スタンダード」。ノスタルジックなブルースギターと心地よいジャズ・ギターが交差するイギリスの俊英リー・ジョーンズの世界へようこそ。「ア・ニュー・スタンダード」は古典的なジャズ・レパートリーへのオマージュ作品であり、その名が示す通り、今の世界情勢へのアンサー・アルバムだ。ロックダウンの期間中に制作され、新たな価値観を生み出しながら成長していこうとする彼なりの意思表示だという。2007年にロイヤル・バーミンガム音楽院ジャズ・コースを卒業後、6枚のソロ・アルバムをリリースし、2019年にはマンチェスターのサルフォード大学で作曲の博士号を取得したジョーンズ。今作はバーニー・ケッセルのブルースに強い影響を受けているようで、ブルージで類まれなテクニックとセンスが全編に冴えわたる。アルバム冒頭のロジャース/ハートの〈ブルー・ムーン〉では「今までで一番印象に残る演奏ができた。幼い頃から母が歌っているのを聴いていたので、アルバムの幕開けにぴったりだと感じた」と話す。

「ここ数年はソロ・ギターに専念しているんだけど、特にブルースに着目しているね。ジャズに傾倒する前はブルースとロックを勉強していて、中でも様々なギター・テクニックを学んできた。そのすべてが自分のサウンドに反映されているんだよ。このアルバムでは特に多様なレパートリーに富んだ、自分が演奏およびアレンジしていて楽しい曲を選んだんだ」

ジャズ・スタンダードを演奏するにあたって最も難しかったのはメロディーとハーモニー、ベースラインをつなぎ合わせることだったそう。

「アレンジにはオリジナリティが大切だと思っている。例えばキャント・ヘルプ・フォーリン・イン・ラヴ」は最初と最後に自分なりの自然なアレンジを加えているんだ」

また今作では2015年のサードアルバム『アフター・ザ・ピア(After the Pier)』収録の〈テル・ミー・アバウト・イット〉を再録音し

ている。

「いろいろなチューニングをいつも試していて、今回はさらにブルース寄りの演奏になっている。この曲はフォークとブルースがリバイバルしていた1960年代のイギリスでデイビー・グレームというギタリストによって作られたダッドガッドという変則なチューニングを使っているんだ。マーク・ノップラーの〈ゴーイング・ホーム：ローカル・ヒーローのテーマ〉にも大きな影響を受けている」

日本文化への造詣も深く、過去には日本の琴にインスパイアされた曲も制作しているジョーンズ。昨年4月には来日ツアーが決まっていたものの、パンデミックの影響で断念せざるを得なかったと肩を落とす。しかし、その代わりに〈ブルース・フォー・ジャパン〉という曲を書き下ろし、「このトラックは日本に捧げる曲で、今はこんな状況だけれども、いつか日本を訪れることを楽しみにしているよ。ここ数年はインターネットを通して何人かの親しい日本の友人もできたし、日本のファンに実際に会える日が今から待ち遠しい。今年はツアーの前にオンライン・コンサートを行う予定なので、それも楽しみにしてほしい」と目下のプランについて語る。

次のプロジェクトは2019年にリリースした『ナイト・トレイン』の第2弾『ナイト・トレインII』で今作のプロデュースも務めた25年来の盟友/メンターのサイモン・ティトリーが携わっている。

「今作よりも前衛的かつ即興的なアルバムになると思うよ。今も昔もギターを演奏する時は、いつも心(ハート)でプレイすることを心掛けている。感じ方だったり、表現だったり、イントネーションだったり、タイムキーピングにしてもね。それらが音楽的に最も大切なことだと思っているから。新しいコンセプトと演奏を掛け合わせることも大事だけれどね」

常に新しい試みに挑んでいるジョーンズ。イギリスから誕生したニュータイプのギタリストの活躍に期待したい。(落合真理)

